
花月水都

篠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花月水都

【Nコード】

N4274P

【作者名】

篠義

【あらすじ】

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

そのいち

「あ、水都か？ 俺や。・・・すまんけど、ちよと、ポカやらかして、しばらく東京へ出張や。十日ぐらいで帰れると思うから、待っててくれ。すまん、時間ないねん。ほな、またな。」

返事をする暇もなく、携帯はいきなり鳴って、いきなり切れた。あんまり突然のことで、俺は呆然としているしかなかった。珍しいこともあるものだ、と、しばらくして、ようやく携帯を胸ポケットに直した。

仕事を終えて帰宅したら、出張のためなのか、同居人の寝室は、綺麗になっていた。出張や残業の無い仕事を選んだはずだが、やはり、それなりのことはあるのだな、と、その寝室のドアを閉めて、ふうと溜息をついた。久しぶりに、ひとりきりになったのだと、その時に気づいて、少し笑った。

「御堂筋、電話。吉本から。」

取り次がれた相手の名前で、「え？」と、御堂筋はびっくりした声を出した。そりゃそうだろう、だって、相手は朝から職場で、ものすごい腹痛を訴えて、病院へ運ばれた相手だ。

「もしもし？ おまえ、大丈夫なんか？」

「おう、さつき、課長には報告した。盲腸やねん。」

「はあ？」

「盲腸を切らなあかんのや。」

「う、え？ もうちょー？ え？ 痛ないんか？」

「今、薬で抑えてあるんやけどな。すまんけど、おまえに頼みがあるんや。ちよつと抜けてきてくれへんやろうか？」

「そら、かまへんけど。」

仕事の引継ぎもあるし、独り身であるから、何かと大変だろうと、課長も、すぐに許可はくれた。しかし、だ。吉本には、内縁の妻がいて、そんな心配は無いはずなのを、御堂筋は知っていた。何事だろう、と、慌てて、教えられた病院へ駆けつけたら、「すまんけど、家まで戻って、入院の荷物と保険証とかを取ってきたいねん。」と、病室で拝む格好の吉本が、青白い顔で待っていた。

「おまえ、そんなん・・・」

「いや、おまえの言いたいことはわかってる。皆まで言うな・・・とりあえず、鎮痛剤が効いてるうちに手続きとかせなあかんのや。頼むから付き合ってくれ。」

確かに、急ぎではあるだろう。説明は後回しに、タクシーで、吉本の自宅へ同行した。保険証や通帳と印鑑、入院の準備を、よろよると吉本は、自らで用意した。そして、それから、いきなり、「まあ、座れ。」と、お茶を入れたした。

「余裕あるんかないんか、ようわからへんな。」

「余裕は無いけど、ここで説明しとく必要がある。・・・俺の家の場所は覚えたか？」

「・・・まあ、だいたいはわかった。」

「それから、これから、俺の嫁の携帯の番号を書いた紙を渡す。」

「はあ？ そうや、嫁っつ、嫁は、どないしたんや？ おまえの嫁っつ。」

「嫁は仕事や。・・・ええか、おまえは、うちの事情を知ってる唯一の人間やから、おまえにしか頼まれへん。すまんけど、頼まれられ。」

「なんや？」

珍しく真剣な顔で、吉本が頭を下げた。そこまでされたら、御堂

筋も、真面目に聞くしかない。「うちの事情」なるものを、御堂筋だけが知っているのも事実だ。職場で、さすがに、情報開示できる内容ではない。吉本の、「俺の嫁」が、同性であるということをした。

「俺の入院は、俺の嫁には内緒にする。急な出張で、東京へ十日出るって、さつき連絡しといた。だから、その十日のうちに、おまえ、適当でええから、うちの嫁とメシ食ってくれ。」

「え？」

依頼の内容が意味不明だ。相手が女性だったとしても、入院することを伏せるのはおかしい。さらに、なぜ、その吉本の女房と食事しなければならぬのかすら、不明だ。

「・・・いや、もう、ほんま。うちの嫁は、『かなり人生投げかけている人』なんでな。俺がおらんと、メシ食うのすら面倒になるんですよ。金は、俺が用意するから、頼む。」

「えーつとな、吉本。意味がわからんのやけどなあ。なんで、入院を隠す必要がある？」

そこで、吉本は苦笑して、「俺の嫁はな。俺が五体満足でないと、『人生全部投げてしまう人』なんよ。せやから入院なんて、もつてのほかなんや。」と、だけ言った。それ以上に、何かを聞ける様子ではないが、何かあるらしいとは、御堂筋も思った。だから、素直に、「わかった。」と、だけ頷くことにした。

「あ、せやけど、手は出すなよ。」

「あほかっつ。俺は完全無欠のノンケじゃっつ。」

「いやいや、わからへんで、俺かって、元はノンケやねんから。」病人でなかつたら、殴ってやりたいと御堂筋は思ったが、さすがに、それはやめた。ここで惚気るのが、吉本の性格だ。腹が据わっているというか、いつでもどこでもマイペースというか、とりあえず、自分が手術しなければならぬということにたいする不安は皆無らしい。

「わかった。ほな、おまえの金で、せいぜい旨いもんでも食わして

もらおうやないか。」

という程度の意地悪を言うに留めておいた。すぐに、病院に取って返し、吉本は、翌日には手術ということになった。慌しく検査に引き立てられていく吉本は、その合間に、御堂筋と仕事の打ち合わせをして、どうにか一日の予定を終えた。携帯電話が使えない場所なので、電源は切つてある。

「・・・たかが十日・・・されど十日・・・一週間までは大丈夫やけどなあ。」

電源の落とされた携帯の画面を睨んで、吉本は溜息をつく。別に大病でも重病でもない。だが、知れば、自分の嫁は、人生を投げる。だから、絶対に教えない。

翌日、予定通り、手術は始まった。下半身麻酔なので、大変、暇だ。意識はしっかりしているので、考えるぐらいしかすることはない。

まさか、盲腸が暴れるなんて思いもしなかった。五体満足の老衰家系だつてというのが自慢だったのに、入院する羽目になるとは思わなかった。正直に、そう告げたら、同居人は、なんと返事しただろう。たかが十日、されど十日。たぶん、「あ、そう。」で忘れられて、たぶん、誘われるままに女とどうにかなって、そのまんま生きていくだろう。

・・・十日というのは、同居人にとって、そのぐらいの時間だ。
・
・
・

学生の頃、たまたま、同じ授業をとった。それも、不人気で俺と同居人だけしか生徒がいなかった。俺は、それを齧ってみたいと思つたからだつたが、同居人はバイトとの兼ね合いで、その時間が空いていたからだつた。

どういう経緯か知らないが、同居人は高校ぐらいから、同じバイトをしていた。それも、夜の割のいいバイトではなくて、昼のバイ

トだ。それなのに、信じられない時間給を貰っていて、学費も生活費も、そこから賄っていた。

「親は？」

「・・・さあ?・・・」

授業を終えて、缶コーヒーを飲む間だけの雑談は、弾むことも無く、いつも、無口に、ふたりしてコーヒーを飲んだ。まあ、煩くなくて、俺は、結構気に入っていたのだけど。そこでする雑談で、少しずつだが、浪速の生活とか周囲全般のことが、臆気ながら掴めていくのが楽しかった。親がどうしているかわからないが、接点はないらしい。だから、独りで黙々と働いて学生生活を送っている。大学への進学も、高校の担任から薦められての事で、当人は、どちらでもよかったそうだ。

「図書館が自由に使えるというメリットと学食は、生活の足しになった。」

勉強がどうかというのでも、交友範囲が広がったというのでもないところが、浪速の変ったところだと、俺は思っていた。

夏休み明けに、顔を合わせたら、不思議そうにされた。だが、気にせずにいたら、元に戻った。よそよそしいのは、いつものことだが、無口に輪をかけていたのだ。

「おまえ、そんなんで、バイトは、うまいこといつてるんか？」

「・・・まあ、おおむねは・・・人と喋ることはない仕事やから・・・」

湯気のアがるコーヒーに、そろそろ寒いと、俺は気付いた。

「しかし、寒なってきたな？」

授業も後期になると、冬になる。学内のベンチで、缶コーヒーを飲むのは、辛くなってきたな、と、俺は思った。喫茶店でも入ろうか、と、誘ったら、「もつたいない。」と、つつばねられた。

「でも、寒いやんけ。」

「なら、やめようか？俺は、これが朝飯やから、付き合おうとっ

たけど、別に、おまえと一緒にすることはあらへんしな。」

「え？」

授業は午後一番で、終わるのは二時だ。その時間に朝飯と言われ、びっくりした。よくよく尋ねたら、朝は食べずに、朝昼兼用なのだという。しかし、たかだか、350mlの缶コーヒーだけが、それというのは、恐ろしい。

「晩飯は？」

「コンビニかスーパーの半額の弁当やけど？ まあ、最近の弁当は、カロリーが高いから一回食べたなら、一日分のカロリーは摂れるんで便利や。」

「はあ？」

バイトは、別に時間制限がないのだそうで、夕方から深夜まで六時間とかいうことでも可能らしい。日曜以外に、毎日、どういう時間でも六時間働けば、ちゃんとした給料がもらえているというのだ。時間給ではあるが、それは最低賃金で、そこに出来高が上乘せになるらしい。

「ほんだら、これから？」

「おう、これから、夕方出て、深夜まで。」

「めしは？」

「途中で、弁当を買う。深夜までやってると、夜食代もくれる。」

「どんな仕事やねんっつ、それっつ。」

「別に、事務仕事。資格が無いから安いけど、そこは経験年数で、カバーしてる。」

なんてことはないように言って、そいつは席を立った。コーヒーを飲み終えたのだ。変わったやつだと思っただが、ちょっと尊敬もしていた。親におんぶに抱っここの俺は、バイト代は、全部がこづかいになった。それに比べて、浪速は、それで全部を賄っていたからだ。 「ほんだら、晩飯食おうやないか？」

「え？ 今からか？」

「おう、俺がおごる。」

「……おごつてもらおう意味がわからん。だいたい、来年には、縁が切れるような人間と親しくなって、おまえに、なんの得があるねん？」

バカにしたように、浪速は、それだけ言うと、スタスタと歩き出した。俺は、浪速の言った意味がわからなくて、腹を立てた。たまま知り合ったのだから、付き合いが続けばいい、と、俺は思っていた。だが、あいつにとっては、たまたま一年、授業と一緒に受けるだけの人間だと思われていたのだというのが悲しかった。

「……あー、あん時、いきなり、喧嘩とかしなくてよかった……えらいぞ、若い俺……」

ぼんやりと、過去の思い出に浸っていると、退屈はしなかった。下半身のほうから、カチャカチャと機械音が聞こえている。切られている感覚というのは、あまりない。ただ、内部に何かが入っているというような、あやふやな感覚があった。下半身が分離しているというような感覚で、体験談として、嫁に聞かせてやれないのが残念だ。

確かに、浪速と顔を合わせるのには、その授業の時だけだった。学部が違うので、どうしても同じ授業というものにはならない。一週間に一度しか会わない相手だし、来年には、会えなくなる確率は高い。

「あれ？ 寒いから、やめるんちゃうかったっけ？」

「いいや、やめへん。先週のあれは、ちょっとムカついたけどな。

俺は、出来た縁は大切にしたいと思うほうや。せやから、メルアドとか携帯ナンバーとか交換しておかへんか？」

「あらへんで、そんなもん。」

金がかかるものはない、という。貧乏人が持つものではないとば

かりに笑われた。電話もないで、と、ご丁寧に付け足された。

「なんかあつたら、どうすんねん？」

「なんか、って？」

「せやから、急に具合悪なって、ヘルプ頼みたいとか、あるやる？」

「そのままくたばってたら、治るやろう。それで治らんかったら、俺は仕舞いつてことでええんちゃうか？」

「なんじゃっつ、それはっつ。」

「なんじゃって、だいたい、生き物っていうのは、自己治癒能力つちゅー有難いもんがあるんや。ほとんどは、それで治る。クスリは、それを促進させるもんであつて、あつたら便利つちゅーグッズやないか。」

「おまえは弥生人か？」

「うーん、それよりはマシやろうな。ほな、帰るわ。」

人間は千差万別だと、浪速から教わった。そんな考え方の人間がいるとは思ひもなかった俺は、正直、頭を殴られた気分で見送った。俺は、丈夫過ぎるほど丈夫なので、そういう目に遭ったことはないが、普通は、そういうことを考えるだろう。だのに、あれは考えていなかった。

「……おまえ……それってことはやな……」

「……誰とも親しいって、暴露したようなもんやぞ……」
連絡する必要が無い。連絡する手段も無い。それは、連絡する相手がいないことを物語っている。

次の週も、ふたりして狭い教室で顔を合わせた。開始の時間になつても、肝心の教授が来ない。

「休講通知は出てなかったよな？」

「なかったな。」

一時間半の授業時間のうち、開始から一時間が経過すれば、勝手に休講とみなされる。それまでは待っているしかない。

「おまえ、下宿はどこやねん？」

「駅の向こう側。」

「俺もそうやねん。近所なんかな？」

「……さあ?……」

くだらだらと喋って、一時間が経過した。やはり、その日は休講で、いつもより半時間早く身体が空いた。いつものように、自販機に向かう浪速の肩に手を置いた。

「待て。」

「なんや？」

「メシ食おう。」

「いや、せやから、俺は、これを。」

「奢らせる。」

「レポートでもやらせるつもりか？」

「おまえの下宿探訪の旅としゃれ込もうやないか？ 連絡する方法がないねんから、連絡場所ぐらい把握させてもらおう。」

下宿先がわかれば、そこへメモを貼っておくという連絡手段だつて使える。いろいろと考えて、確実に、浪速を掴まえられる方法を考えた。

「えーっと、俺の下宿を知って、何かメリットがあるんやろうか？」

「

……めっさあるつちゅーんじゃや、ぼけがつつ……

のんびりと、思い出に浸っていたら、「麻醉のかり加減がわからなくなるので、寝ないでくださいな。」と、揺すり起こされた。眠っているのではないのだが、目を閉じていたらしい。機械音が、カタカタと聞こえているだけの単調な時間は、とても退屈で、「終りました。もう、眠ってもいいですよ。」と、声をかけられて、俺は、ほっと目を閉じた。

浪速の下宿は、とんでもなく古いアパートで、辛うじて風呂とトイレが一体になったユニットバスだけはあったが、それ以外は、三畳ばかりの空間があるだけの部屋だった。

「狭いなあ。」

「そうか？ 寝れたらええんやから、こんなもんやろう。」

結局、コンビニで弁当とお茶を買って、その部屋を訪ねた。とりあえず、どんな場所なのか知りたかったからだ。テレビも年代モノのやつで、リモコンがない。

「音はいるか？」

「いいや、なくてええ。俺、テレビは、あんまり見やへんねん。」

「ああ、俺もなんや。たまに、教育放送とかスポーツを見るぐらいや。」

万年床を部屋の隅に片付けて、ふたりして、弁当を食べた。本当に何も無い部屋で、あるのは、教科書と思しき本と、図書館のタグが貼られた本ぐらいだった。

「休みは、何してるん？」

「寝てる。後は洗濯したり近所を散歩したり、本屋で立ち読みするぐらいかなあ。おまえは？」

「似た様なもんや。コンパとかある前は、服を買っけどな。」

「コンパかあー、あれは面倒や。一回行って懲りた。・・・なんていうか、ゆっくりさせてもらわれへんのが辛い。」

「そうか？ 呑んで騒いで暴れるっていうのは、ストレス発散すんぞ。」

「なんや、ストレス溜めてるんかいな？ 吉本。」

「え？ ないか？ ほら、レポート重なったりとか、バイト先の間関係とか、いろいろとあるやないか。」

「ないで、そんなん。」

「はあ？」

まあ、後から考えたら、こいつにはなかったたろうと納得はした。

誰にも期待しないから人間関係が疎ましいなんてことは感じなかったはずだからだ。ぽつんと、独りで立っているから、何にも支えられていないから、こいつは、揺れることはない。だが、本当は、それは寂しいことだということを知らない。

「なあ、浪速。今度は、俺のどこを探訪しようやないか。」

「・・・え?・・・」

「うちも似たり寄ったりやけど、クッションとぬいぐるみがおるねん。」

「はあ? おまえ、そういう趣味なんか?」

「ちやうちやう。うちのお袋の趣味なんや。でも、興味湧いたやろ? ついでに、こたつがあるで。」

「こたつねえー。」と、浪速は首を傾げていたが、次の週は、本当に提案に乗ってくれた。そして、彼は、こたつに入って、「これ、ええなあ。」と、しみじみと呟いた。

そのに(前書き)

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。
意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

それに

同居人が出張して、二日が経過した。携帯が繋がらないので、連絡の取り様が無い。休日にすることもなくて、コンビニで買ってきたクロスワードを暇つぶしに解いていた。

正午のサイレンが聞こえたものの、別に空腹でもないので無視した。こんなふうにはひとりでごす休日というのは、久しぶりのことだ。学生時代は、とりあえず、忙しくて休日は睡眠補給日だった。同居人と知り合ってから、それは変わらなかったが、起きると同居人が、となりに寝ているというのがパターンになっていた。

……そういや、ひとりだったのは、あいつが実家へ戻る時ぐら
いだったよな……

学生の頃は、一応、年末年始だけは、きっちり、あいつは帰省していた。別に、休みではなかったから、俺は働いていたのだけど。そういえば、一度だけ年越しをしたことがあったな、と、それを思い出していた。なんだったか忘れたが、帰省するつもりだった同居人は、「帰らない」と、言い出して一緒に、初詣に行ったのだ。大学を卒業してからは、帰省することはなくなったが、あれからは三日の朝には帰ってきていた。大学は十日からだっただのに、だ。あの当時は、まだ、そういう関係ではなくて、ただの親友ぐらいのことだった。

……あれからか……おかしくなったのは……

卒業する少し前から、そういう関係になったが、よくよく考えたら、あの年越しの後から、あいつの態度が変わったように思う。なんだか、よくわからないうちに、事態はいろいろと進んで、何がど

うなつたのか、花月は、俺を抱きたいとか言い出して、それから、なし崩しに関係は始まった。思い出しても、お笑いとしか言いようのないことをしていた。どっちも、やり方を知らなくて、わざわざ大学のコンピュータールームで、それらをネット上で検索して試したりしていたのだ。

「……今では、ベテランやろうなあ……」

最初のドタバタを思い出して、笑ってしまった。まるで、プロレスでもしているのか？ というぐらいの乱暴さだったし、加減がわからなくて、どっちも一日、沈没したこともある。世間に、そういう人間がいることは知っていたが、まさか、自分がそうなるとは思わなかった。俺の正しい人生設計というものは、そこで頓挫した。だが、離れようと思ったことはない。もう、すでに、それは無理なんだろうと、身体が感じている。夫という地位は、手に出来なかったが、嫁という地位は手に入れた。誰かと一緒に暮らして、とりあえず死ぬまで生きていくという設計の根本は、ちゃんと遂行されたと思う。それも、「愛してる」とかいう恥ずかしい関係ではなくて、花月という人間がいることで、安堵できるという関係に確立された。

ぼんやりとしていたら、いきなり携帯が鳴った。見慣れない番号なので、少し躊躇して、それから出た。もしかして、同居人からかもしれないと思ったからだ。

「……もしもし……はい……浪速ですが？……え？
みどうすじ？……え？ はあ、いえ、こちらこそ、ご迷惑を……はあ……ええ……」

電話の相手は、同居人の同僚で、少し前に、とんでもないイベントに参加させてくれた人でもあった。初めまして、の挨拶から自己紹介までして、いきなり、御堂筋さんは、「今、そちらの最寄り駅なんです……」と、切り出した。

「すいません、お昼、まだですよね？ 一緒に食べてもらえませんか？」

か？」

「え？」

「えーっと、吉本から頼まれてもって・・・なんでも、浪速さんは、ひとりだと食事もしないから、相手をして欲しいって頼まれたんですわ。」

恐縮する御堂筋さんは、同居人に頼まれたらしく、律儀に電話してきたらしい。

「・・・子供やあるまいし・・・なに、頼んどるんじゃない、あのたわけっつ・・・」

内心で、同居人を罵りつつ、丁寧に断った。しかし、相手も折れてはくれない。一度でも食事をしないと、後から大変なことになると、懇願されるにいたって、「わかりました。」と、重い腰を上げた。

駅前で待ち合わせて、近くのファミレスで食事をする事になった。顔も見たことの無い相手では、話も進まないし、気づつない気分ではあった。

「はじめまして、御堂筋です。この間は、助かりました。」

「こちらこそ、浪速です。大丈夫でしたか？」

当たり前障りのない会話をしながら、サービスランチを食べた。

「あの、吉本は、なんのポカをやらかしたんですか？」

「えーっと、俺も詳しいことはわからないんですけど、なんか東京事務所との連絡ミスがあったらしくて、担当のあいつが出向かな話にならんかったみたいで・・・代われるんやったら代わったんですけど。」

「そうですか。あいつ、どっか抜けてるから、迷惑かけてるんじゃないですか？」

「いや、そんなことはあらしまへん。でも、相当に浪速さんのことは心配やつたらしくて、なんでもいいから、『飯を食わせてくれ』って拝み倒されましたで。そんなに無頓着なんですか？」

「そんなことはないねんけどなあ。食べてますよ。自炊するほどの

ことはしてへんけど。・・・ほんま、すいません。帰ってきたら、制裁を加えておきますから。」

なぜ、わざわざ見知らぬ相手と食事なんかせなあかのや、と、首を傾げつつ、とりあえず食べた。食べ終われば帰れるだろうと思つてのことだ。

「せやせや、帰りにスーパー行きましょ。」

「え？」

「金預かってるから、レトルトとか買わしてもらいますわ。」

「金預かってるって？」

「ほんまは、二日か三日に一度は食事に誘ってくれ、と、言われてますけど、仕事あるし、浪速さんは時間が遅いんでしょ？　せやから、折衷案ということ、ええですか？」

「はあ、まあ、ええですけど。・・・あいつ、頭に虫でも湧かしたるんちゃいますか？　俺、そこまで生活不能者やないねんけどなあ。」

「さあ、俺もようわかりませんわ。まあ惚れとるってことにししたら、どうですか？」

そこで、ふと気づいた。この人は、うちの関係を知っているのだ。「御堂筋さん、気持ち悪いとかきしよいとかないんですか？　その・・・ほら・・・うちは・・・」

直接には言えなくて、ちよっと口ごもった。普通感覚では、気持ち悪いと言われても仕方がない。しかし、相手は、カラカラと笑つて手を振った。

「なあーんもありません。別に、そんなん個人の趣味ですやろ？」

俺は、そっちではないけど、別に、ええと思えます。・・・気楽やろつな、とは思います。」

「気楽ですね、確かに。」

「イベントごとにプレゼントせんでもええし、ホテルでディナーとか、気取ったラウンジでカクテルとか、そんなん考えんでもええつちゅーのは、羨ましいことですわ。」

そう肯定されて、少し気が楽になった。まあ、そういう人だからこそ、あんな村の行事に、俺たちを行かせたのだろう。そういうことは、一切なかったな、と、自分でも気付いて笑った。ただ同じ授業を受けて、どちらかの部屋で飯を食ったりするぐらいのことだけだったからだ。そういう関係になつてからも、たまに強引に、花月に連れ出されはしたが、それだつて、どこかの山の上とか海岸とかまで散歩するぐらいのことで、気の利いた台詞も、おしゃれな食事なんてものもなかった。

結局、同居人がいつ帰れるのかわからないまま、スーパーの袋いっぱいのレトルト食品と菓子パンを持たされて、御堂筋さんと別れた。たぶん、これは消費できないだろう。家には寝に帰るだけだから、食事は外食だ。誰も居ない家は寒いから、あまり長時間居たくない。

「先生、最短で退院させてもらいたいんですが、明日とか、どうですかね？」

「・・・吉本さん・・・それは無茶です。まあ、経過は良好なんです、週末ぐらいには退院してもらえますでしょう。」

「土曜日の朝ですよ？」

「まあ、いいですけど、珍しいですよ、吉本さんみたいな患者さんは。普通は、延ばして欲しいとか言います。」

「そら、俺かて、なんもなかったら延ばしてほしいところですわ。」

でも、俺には、早く戻つて、無事に姿を確認させないとあかん相手があるんです、と、正直に言ったら、「わかりました。」と、医者に苦笑された。

週末に退院できることが判明して、とりあえず職場に連絡した。別段、忙しい時期でもないのに、「ゆっくりでええぞ。」と、課長からも、自宅療養するように勧められた。

「ええ、わかってます。でも、あんまり休むと忘れてまうんで。はい。はい。はい。ああ、すんません、御堂筋はいますか？はい。はい。」

さすがに、術後三日ばかりは、痛いし熱は出るしで、公衆電話まで遠征できなかった。まだ痛みはあるが、歩けるので、看護師の詰めの横にある公衆電話まで遠征した。

「おう、御堂筋か？ 俺の嫁は元気か？ メシは？。なに？ レトルト？ あほかっつ、そんなもん、食うかいつつ。」

とはいうものの、俺の嫁は人嫌いなので、御堂筋にしたって、それが限界だったのは、わかっている。たぶん、週末に家に帰ったら、食べていないレトルトの山が、ひとつ転がっているだろう。

「ああ、ええつて。うん。うん。うん。すまんな。月曜日には顔出すさかい。うん。うん。ほな。」

礼だけは言つて、電話は切った。ということとは、そろそろ人生を半分ほど投げ出していることだろう。慌てて、浪速の携帯の番号をプッシュする。

「俺。俺や。あ。あ。あ。」

出た途端に切られた。

「あほや。携帯やないから、リダイヤルできひんに。腹痛いやんけ。」

「俺俺詐欺」みたいな言葉だったが、声でわかるはずだ。だが、それすら忘れていいのか、と、思っで心配になった。もう一度、プッシュすると、今度は、ぶっきらぼうな応対をされた。わかっではいたらしい。

「俺俺詐欺ちゃうで、水都。ああ、ごめん。充電器忘

れてな・・・うん・・・どうにか土曜日には帰れると思う・・・
ああ、おまえ、仕事か？・・・うん・・・うん・・・俺も、めっさ
忙しいねんて。・・・何？ 愛しいダーリンからのラブコールが欲
しかった？・・・うそうそ・・・うん・・・うん・・・ほな、
また電話するさかい。うん。・・・忘れんなよ、おまえは、『俺
の嫁』やねんからなっつ。」

それだけは、はつきりと言って電話を切った。あんまり長いこと
放置すると、『俺の嫁』は、『俺の嫁』であることを忘れる。鳥頭
なんではなくて、寂しくて、その存在自体を忘れようと努力する。
忘れると、たぶん、人生すべてを投げるであろう。正しい人生設計
なんてものを思い出して、実行するに違いない。だから、早く帰ら
なければならぬ。それは、俺の嫁でなくなつて、ただ正しいと世
間で評価されるだけのものではない。水都にとっては、人生なん
て生きてればいいんだらうという程度のものになってしまう。それ
だけはダメだと、俺は思うから慌てるのだ。

結局、俺たちは、その語学の授業が気に入つて、次の年は、その
上の授業も受講した。やっぱり、俺と浪速しか生徒がいなくて、教
授も同じ人だったから、気軽な感じで勉強させてもらえた。だから、
毎週、やっぱり、顔を合わせて、たまには、浪速か俺の下宿で飲む
こともあつた。外食は金がかかるから、俺が作った食事を食べるこ
ともあつて、週に何度かは、顔を合わせているようになった。

浪速は、それなりの顔立ちをしていたから、適当に彼女がいた。
適当、というのは、何度も変わるの、本命はないのか？ と、尋
ねたら、「適当でいい。」と、当人が答えたからだ。

「それなら付き合つなよ。」
「そもいかんやろ？ 適当に付き合つて、相手が本気やつたら結
婚したらええことや。」

一緒に食事していたら、爆弾発言をかまされた。

「おまえの意思は？」

「え？」

「だから、おまえは、本気で惚れるような相手はおらんのか？」

「……考えたこともない……でも、卒業したら就職して結婚するのが、普通にやることやる？ さつさとやつとかんとあかんかな？ と、思つて。」

人生の正しいレールっていうのに沿つて生きていたいというのが浪速の考えらしかった。だが、それで、浪速が楽しいとか幸せだとかいうのではないところが、とてもおかしੀと思つた。ただ、普通であれば、告白してくれた女性を、どうとも思つていなくても結婚して家庭を作るといふのだ。

「おかしীয়ろ、それ。」

「なんでや？」

「別に、これと思う相手が目の前に現れるまで、独身でおつたらええがな。そうでないと、辛いぞ。」

「……あははははは……吉本は幸せもんやな？ 相手に、何の期待もせんかつたら、何をされても、何にもないんやで？」

「だからな、期待できる相手を、やなつ。」

「……いらんねん、そんな……とりあえず、死ぬまで生きてたら、そんでええんや。」

……ああ、こいつ、ちよつと壊れてるな、と、俺も苦笑した。たぶん、それが気になつて縁を切れなかつたのだと、その時に気づいた。何も期待しないでいるなんて、相手にも失礼だ。たぶん、この水都の態度が、彼女と長続きしない原因だろうと解つた。誰だつて、自分に關心を向けて欲しいものだ。告白して、それを受けてくれたなら、少しくらい關心があるのだと思つたろう。なのに、相手の態度が変化しなければ、関係は維持できなくて当たり前だ。それすら気付かないこいつが、哀れだと思つた。どっかおかしीとは思つていたが、それでは、精神的な安らぎは、絶対に手に入らないの

だと、こいつは知らないのだ。

仕事をしていたら、出張している同居人から電話があった。いつものように、いつものバカ話をした。最後に、同居人が、「忘れんなよ、おまえは、『俺の嫁』やからな。」と、きつく注意をされた。……今更やる？ それは……

携帯を切つて、人気がない廊下で、ひとりで笑った。ただ声を聞いただけなのに、なんだか、ほつとしたのだ。

だが、期待してはいけない。もし、仕事の都合で出張が延びたら、落胆するから、それが怖い。もし、そのまま、戻れなかったら、忘れるために、マンションを引っ越すだろう。忘れてしまえば、寂しいことも悲しいことも感じなくていいからだ。

そのまま、どこかで、誰かの手をとればいい。何も期待せず、ただ誰かと暮らせば、それで忘れていくだろう。ただ、無傷ではないから、少し臆病になってしまっただろうか。

「……ごめんな、花月……土曜までは忘れへんから……」
切れてしまった携帯を、ぼんやりと眺めて、遠いところにいる同居人に謝った。どこかが壊れている自覚はある。それを肯定して、それすらひっくりくるめて認めてくれるのは、花月だけだった。それは大切なことだとは思う。だが、それがなくなったら、自分で立つていられなくなりそうで怖いから、認めたくはない。なんでもないとだが、花月が家に居れば、ほつとする。肌を合わせれば、それだけで落ち着く気持ちがある。ずっと、それがなんであるか考えることはしない。考えたら、怖くなると予想が着いている。

……なんだかなあー、あいつと暮らしてからのほうが、余計に壊れたような気がせんでもないぞ……

それが良いことだったか、どうか判じかねている。だが、悪いことではなかったとは思っている。

病院の消灯は早すぎて眠れない。テレビばかり見ていて飽きてしまったし、読書する気にもなれない。

考えるのは、同居人のことばかりだ。どうせ、食べられていないレトルトが、台所で山をひとつ作っているだろう。菓子パンぐらいは食べているだろうか、それとも、気分転換に自炊でもしているだろうか。いや、自炊なんてしないか。また、コンビニ弁当で食いつないでいるだろう。

寂しがつてはいないだろう。外面的には、普通に淡々と暮らしているはずだ。なにせ、当人にも自覚はないのだ。寂しいという感情が、水都には稀薄だ。だから、淡々と生活することはできる。その感情を自覚したら、水都は余計に壊れてしまうからだ。

吉本だつて、それを初めて見た時は、衝撃で絶句した。たぶん、誰一人知らないだろう、吉本だけが知っている浪速の泣き顔だ。

.....あれを、見たから、俺は手を出したんだもんな.....

学生時代の年末に、帰省するから挨拶がてらに顔を出した。そのまま、次の日に帰省するつもりで、荷物も持っていた。あまり酒には強くないから、ふたりして、缶ビールを三本も開けると、ふらふらになる。浪速は、テレビを、あまり見ないから、酒盛りするのも無言だ。適当に世間話くらいはするが、それだつて途切れたりもする。

大学のある街は、とても静かだった。冬休みで、学生がいなかったらだろう。

「静かやな？」

「このほうがええ。」

騒がしいのは好きではないから、どちらも、のんびりと好きなことを喋って、気付いたら酔っぱらって横になっていた。水都は、まだ飲んでいて、窓のほうを眺めていたので、俺は目を閉じた。

「・・・あかんねん・・・あかんねん・・・花月は消えたらあかんねん・・・」

気持ちよく眠っていたのに、いきなり、揺さぶり起こされた。何事だ？ と、目を開けて絶句した。いつも無愛想な浪速が、本気で泣いて、俺を揺さぶっていたからだ。

「・・・花月？・・・花月？・・・消えたらあかん・・・」

「・・・え？・・・」

不思議な呪文みたな言葉を、浪速は繰り返していた。「消えたらあかん。」と、繰り返す。黙って聞いていた。いきなり、浪速が泣いていたからびっくりしたっていうのもある。ついでに名前で呼ばれたのも、びっくりだ。

「・・・花月が消えると、俺も、どんどん小さく丸くなって、しまいになくなるねん・・・せやから、花月は消えたらあかん・・・」

酔っぱらっているのだろうが、それにしたって、驚きだ。世の中を斜めに生きているような浪速が、呟く言葉は、子供みただった。何度も何度も、「消えたらあかん。」と、繰り返されるに至って、浪速は寂しがりななかもしれへんと、ようやく気付いた。

人生を正しく生きていくというのは、家族ができることだ。誰かが傍にすることが、浪速の願いの根本であるのだろう。本人は、そんなこと、気付いていないから、あんな物言いになるんだろう。

「・・・せやんなあ、おまえ、連絡する相手がおらんねんもんなあ・・・」

しみじみと、浪速の涙に、それを実感した。連絡する相手は、俺だけだ。だから、なくなるな、と、せがむのだ。

「・・・えーつとな、水都・・・」

「ん？ なに？ 花月。」

初めて、名前で呼んだら、嬉しそうに笑った。涙でぐちゃぐちゃの顔で、嬉しそうに笑う浪速に、胸が痛くなった。

「・・・おまえ、俺におつてほしいんか?・・・」

「・・・うん・・・おまえしかおらへんもん・・・」

ああ、しらふではないな、と、こちらも笑った。でも、これが、こいつの本音なんだろう。なんだかんだと、連るんでいたのは、浪速にとつても嬉しいことだったのだ。

「わかった。ほんなら、消えへんって約束するわ。大丈夫や、消えたりせえーへん。」

起き上がって、浪速を抱きしめた。緩々と、背中に、浪速の手が添えられて、やっぱり、わんわんと泣かれた。

「明日、起きたら、ごはん食べて、ほんで、夜には二年詣りに行く。約束や、水都。」

「・・・うん・・・」

年明けに、少しだけ帰ることにした。別に、親は帰らなくても、文句は言わない。適当な理由があれば、それで、どうにかなる。寂しいのだと知らない水都に、寂しいと教えてしまったのは、俺で、しかも、継る相手も俺だけだ。それなら、責任は取ろうと決めたのだ。

次の日、起きたら、お約束のように、浪速の記憶はすっかりかんに抜け落ちていて、なぜ、俺が帰省を取りやめて、ここに居座るのか、わからないと首を傾げていた。

・・・でもな、おまえの気持ちは、もうわかったから・・・俺は、迷うことはなかったわ・・・あんなに泣かれたら、もう、他はどつでもええつちゅー気になるっていうーんや・・・

早く帰りたいと、真つ暗な病室で、目を閉じた。卒業する前に、関係は親友ではなくなったけど、別に、それでいいと思った。両親に孫を見せるつもりは、元からなかったし、何より、この壊れているやつの傍に居てやりたいと思ったからだ。水都は、関係が変わってしまふことに躊躇はしなかった。ただ、俺がやることを受け入れた。たぶん、当人は気付いていないだろうが、本当は、それを受け

入れることは難しいことだったのに、だ。支えてくれる相手として、俺を考えているから、水都は受け入れた。独りでは立っていられなくなるのだと知らずに、離れることはできなくなるのだとも気付かずに。だから、水都が生きている限りは、傍に居て、水都の死に水を取るつもりで、俺は、傍に居る。そうしないと、水都は、人生を全て投げてしまっただろう。なんとなく、気が合ったのが、最初の躓きだったかもしれない。俺も、あいつでいいと思うから、この関係で納得できる。

・・・大切に、とか言うんではないけどな・・・とりあえず、一緒に居るのだけは絶対や・・・

七年も夫婦もどきでいると、そんな感じだった。

土曜日は雨だった。退院手続きや、次の診察の予約やら、何かと手続きがあつて、終わったのは午後過ぎていた。そのまま、自宅近くのコインランドリーへ飛び込み、洗濯物を放り込んだ。十日の入院で、動けるようになってからは洗濯していたが、それでも溜まっていた。

・・・うちにもあるんだろうな・・・ついでだから、ここへ運んできて一気にやるか・・・

同居人は、本日、出勤だと言つてたから、夕方まで時間はある。

とりあえず、洗濯して、掃除して、晩御飯を用意するつもりで、身軽に家に帰ったら、居間に入って死ぬほど驚かされた。

居間のこたつの横に、同居人が転がっていたからだ。スーツのまま、ごろりと倒れている。

「みっみなとおおっつ。」

ああ、失敗した。十日は長かった。栄養失調か過労か、それとも、別の病気か、とりあえず、救急車を呼ばなければつ、と、俺が慌てふためいていると、むっくりと、水都は、起き上がった。

「・・・あ・・・お帰り・・・えらい早いやないか。」

「・・・お？・・・」

「・・・まだ一時前やんけ・・・はるかでも使こつたんか？・・・」

「・・・おつおまえ・・・なんで・・・」

別に、どこかが悪い様子ではない。目を擦って、あくびをしているところを見ると、明らかに寝起きた。

「おまえが、今日、帰るっていつから、今朝四時まで仕事してた。ほんで、帰ってから、掃除してご飯でも用意したろう、と、思ってたんや。」

しかし、さすがに深夜残業は堪えて、居間で沈没したらしい。期待はしないが、準備くらいはしてやろうと、浪速は考えた。帰らなかつた、としても、家事をやつたと、自分に言い訳できる程度に。

「まぎらわしいことすんなやつ。」

「・・・なにが？・・・」

「俺、おまえが具合が悪いんかと慌てたやないかつ。」

「・・・ああ・・・すまんなあ・・・仕事は無事やつてんな。よかつたわ。」

さすがに、脱力して、俺は座り込んだ。そして、同居人の顔を見て、ほつとした。こいつは、心と身体が連動しないので、ちゃんと日常生活はしていた様子だったからだ。痩せてなければ、それでいい。人間として生きていくことはできていた。だが、それだけだ。笑いもせず泣きもせず、ただ淡々と生きていただろう。

「すまんかつたな、水都。」

「しゃーないやろ、仕事やねんから。だいたい、おまえ、見ず知らずの御堂筋さんとメシ食うのは、大変やつたんやぞつ。俺は子供かつ。誰かおらんと、メシも喉を通らへん、乙女かつ。このどあほつがつ。」

新聞紙の束で、ごつつつと頭をはたかれる。それとほ痛くはないが、笑えてしまう。怒ったフリで喜んでいるのがわかる。ぽんぽんと罵詈雑言が吐き出されるので安心する。人生を投げてはいない証

扱だ。

「それやったら、『ダーリン、さびしかったあーあはくん。』とかいう、お出迎えしてくれよ、嫁。」

「できるかあああいつつ。なんで、『あはくん』やねんつつ。そんなんしてほしかったら、キャバクラでもメイド喫茶でも行ってこいつつ。」

「ああ、それもええな。『お帰りなさい、ご主人さまあくん』で、ひとつ、よろしく頼むわ、嫁。」

「さつき、『お帰り』って言うたつた。」

「なんで、そんなに素っ気無いかなあ、俺の嫁は。」

「おまえが無茶な注文ばかりするからじゃつつ。……なんでもええわ。とりあえず、着替えたらどうや？」

ふたりともスーツ姿だ。万が一の場合を考えて、俺は病院から、スーツで帰宅した。ようやった、と、自分を褒めてやりたいぐらいの機転だ。

「おまえも着替える。せやせや、洗濯物をコインランドリーへ持っていくかなあかんねん。その間に、おまえ、メシ買おてきてくれ。」

「あるで、そこに。」

同居人が指し示す場所には、やっぱり、こんもりとレトルトの山があった。

……やっぱりか……

「ほんだら、何食ってたんや？ 霞か？」

「あほ、霞で生きていけるんやったら、俺、大金持ちになつとるわつつ。仕事で残業ばかりしてて、家には寝に帰ってただけや。外で食ってた。」

「そうか、ほんなら、晩御飯は力入れて作らせてもらうで。寂しい思いさせてた詫びや、なあ、嫁。」

「たまには、俺が作ったる。仕事で疲れて帰った旦那を癒したらんとあかんからな。」

にっこりと笑って、俺の嫁は立ち上がった。その腕を掴んで背後

から抱きしめた。

「ただいまやで、俺の嫁。」

「おかえり、俺の旦那。」

会いたいと思ったのは、どちらも一緒だと思う。ただ、俺の嫁は、ちよつと壊れていて、人生を些か投げている人なので、これぐらいのスキンシップで事足りる。『俺の嫁』であるかぎり、こいつは、人生を全て投げることはない。寂しいのだとわからなくても、誰かの体温があれば、寂しくはないのだと、身体は気づいているはずだ。だから、ぐにやりと身体から力が抜ける。支えて貰えるとわかつているからだ。

「・・・久しぶりに・・・ナンパでもしようかとおもった・・・」

「浮気しても意味ないねんで？ おまえ、『俺の嫁』やからな。旦那の俺しか、あかんねん。」

「・・・わかつてる・・・なんか腹立つな・・・」

「まあ、ええがな。とりあえず、そのラーメンでも食うて、コインランドリーとスーパーへ行こうや。・・・俺、鍋がええわ。後で、雑炊できるやつにして・・・」

「わかった。水炊きでええな。俺がスーパー行くから、おまえ、洗濯してくれ。」

別段、甘い台詞なんてない。ただ日常の会話をしているだけだ。

それでいいと、お互いに思っている。日常を暮らすだけで、満足だと、互いに思っているからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4274p/>

花月水都

2010年12月11日20時10分発行